

## 世阿彌の「拾玉得花」について

野 間 光 辰

『拾玉得花』は、これまで長年の間、金春禪竹の著作であると考へられてゐたのであるが、最近になつて、實はそれは誤であつて、觀世世阿彌が禪竹に與へた傳書であることが明かにせられた。けれどもその内容は、なほ確認せられるに至らなかつた。といふのは、從來禪竹の作と信じられてゐた『拾玉得花』が、果して世阿彌の作にふさはしい内容を持つものであるかどうか、斷定に躊躇せられたからである。それにはどうしても、確かに世阿彌の著作であることを納得させるに足る、新しい證本の出現が必要であつた。随つて『拾玉得花』は、改めて世阿彌の著作集に加へられるやうにはなつたけれども、内容未確認のゆゑに、單に參考として附載せられるに過ぎなかつたのである。しかるに此度、文學士金春晃實君によつて、この學界多年の宿題を一舉に解決するに足る證本が発見せられた。それがここに紹介しようとする、金春流宗家金春信高氏所藏の『拾玉得花』である。

金春宗家所藏本は、大本袋綴一冊、墨付二十四丁、奥に禮紙四丁を附す。紺表紙裏の見返しには、金地に丸に鷹の羽の喰違ひと丸に五つ寶形の紋を空捺しにした料紙が用ひられてゐる。表紙に外題書はないが、第一丁扉の左肩に「拾玉得花」の四字を墨書してある。これこそ紛れもない『拾玉得花』の現存唯一の傳本である。

金春宗家所藏本は、しかし、世阿彌が禪竹に附與した自筆の原本ではない。その奥書が示すやうに、六代八郎安照（法名

禪曲、元和七年八月二十一日卒、年七十二)の次男八左衛門安喜(法名淨元、寛文元年六月十五日卒、年七十四)が、明暦二年正月二十一日付を以て、養子七左衛門元喜(法名淨徹、貞享二年卒、年六十)に附與相傳した轉寫本である。七左衛門は安喜の兄七郎氏勝(法名清本、慶長十五年八月三十日卒、年三十五)の女を母として、加賀藩抱への能役者林長兵衛の次男に生れ、幼名を五郎作といつたが、故あつて正保四年二十二歳の時、養はれて安喜の子となり、七左衛門元喜と稱した。その間の事情は、『金春家祖先並藝傳來之由緒帳』ならびに『秦宿禰竹田金春家略系』等に詳しい。そして養父安喜が落髮入道するに及んで、家督を相續して八左衛門を名乗り、晩年に至つて元喜を照喜と改めたといふ。この七左衛門元喜を養子に迎へてから間もなく、衰老退隱の期近きことを悟つた安喜は、あらかじめその時に備へて、承應・明暦の間にわたつて、家藝一通りの傳授を元喜に相傳した。大正四年三月吉田東伍博士が集刊された『能樂禪竹集』は、その多くをこの八左衛門流の副本によつたといふことであるが、右『禪竹集』所收の『至道要抄』は承應四年に、『歌舞髓腦記』は明暦二年三月十七日に、それぞれ安喜の奥書を附して元喜に與へたものである。又、昭和十六年の頃、川瀬一馬博士が大和駒岡乘圓氏所藏の金春家舊藏傳書類の中から發見して、新たに世阿彌の著作に加へられることになつた『六義』と『遊樂藝風五位』の兩書も、前者は明暦二年五月六日に、後者は同じ年同じ月の十一日に、やはり安喜から元喜に附與した寫本によつて、初めてその内容が明かになつたものである。今は金春宗家に傳へられてゐる『拾玉得花』も、もとはこれらの傳書類と相前後して、安喜から元喜に相傳せられたものであつた。

八左衛門安喜は、家筋からいへば、金春の庶流である。庶流の八左衛門家に、一子相傳の、家の大事の傳書類が寫し傳へられたことについては、そこに理由がなければならぬ。本書の安喜の奥書には、「歷代祕曲、傳家督一人、而其他庶子傍孫、遂不能窺闔奥於萬一矣」といひ、しかし「如是、兄七郎氏勝、不幸而早世故、老父、家傳之祕奧相續、而欲傳之子々而孫々、而以殘萬世、悉家傳祕曲教授、於所令相傳也」と説明してゐる。安喜の兄氏勝は、三十五歳の若

さで、父に先だつて死んだ。父安照は時に五十三歳、既に家督を氏勝に譲つて隠居の身分であつたが、嫡孫七郎重勝(法名宗竹、寛永十一年九月四日卒、年三十九)が當時まだ十五歳の若輩であつたため、再び金春太夫の職に復し、重勝の藝事指導に努めることになつた。しかし何分にも老齡のことである。そこで自分の死後に於ける家藝の相續ならびに重勝の後見のことを慮つて、次男の安喜に「累代一人相讓之嫡傳口決、不<sub>レ</sub>殘<sub>一</sub>一事<sub>一</sub>令<sub>レ</sub>教授、使<sub>レ</sub>家書悉寫<sub>レ</sub>之、加<sub>レ</sub>證據之名判<sub>一</sub>而與<sub>レ</sub>之」(秦宿竹禪田金春家略系)。これが「庶子傳受之初」であつた。「金春家祖先並藝傳來之由緒帳」には、「家傳之儀は、次男八左衛門安喜に、不殘傳授仕候、歌舞根本一子相傳を庶子に傳授仕候最初に而御座候」とあつて、あたかも安喜だけに家傳の傳授を免許したかのやうに記してゐるが、三男氏紀にも一部を相傳、書寫せしめたことは、庄左衛門家に元和三年氏紀書寫の『花鏡』の轉寫本が傳へられてゐたことによつても明かである。

それはともかく、かうして金春家傳の祕書類は、庶流の八左衛門家にその副本を傳へることになつたが、やがて元和七年に安照は歿した。嫡孫の重勝は既に三十歳に達してゐるが、安照は何故か家傳の書物を一旦元喜・氏紀の兩人に預け、所領五百石を分つて三百石を重勝に、百五十石を元喜、五十石を氏紀に配當して死んだ。これが後に重勝と元喜との間に確執を生ずる原因になつたのであるが、しかし家傳の書物は安照の死後間もなく、十月八日付の元喜・氏紀兩人連署の讓狀を添へて、重勝の許に送られた。その讓狀は「金春家之書物之日記、七郎殿へ渡申候書物覺」と題し、「次第不同書物以上貳拾貳」部を列記した末に、なほその外に「松下云事之狀あまた」及び「世阿彌諷本五番」を附記してゐる。そこに著録せられた「風姿花傳 一冊」・「花のか、み又クワキヤ同」・「至花道同」・「世阿彌諷本五番」は、先年川瀬博士が駒岡乘圓氏所藏の金春家舊藏傳書類の中から發見せられたのであつたが、しかし「拾玉得花同(一冊)」はその中にはなかつた。しかし、やはり川瀬博士が金春家舊藏傳書類の中から見出された、十四代七郎氏綱(法名禪林、安永七年正月十三日卒、年七十二)の自筆書留には、世阿彌・禪竹兩名の奥書の全文、もしくは兩奥書の年月署名のみを抄記したものなど、すべて五種に及

んであるさうであるから、その頃までは金春宗家に相傳せられてゐたことは間違ひはない。恐らく明治維新前後に、世阿彌自筆の原本は金春宗家から流出し、八左衛門家所傳の副本も亦篋底に秘められたまま、いつとなくその存在を忘れられてしまつたものと見える。それ以來『拾玉得花』の正體が不明になり、その作者に關して大きな誤が傳へられることになつたのである。

もつとも、吉田博士が『拾玉得花』を禪竹著述の一と認めて、これを『禪竹集』に收められたことについては、それにはそれだけの十分な根據があつた。即ち博士は、専ら八左衛門家相傳の副本を底本として『禪竹集』を集刊せられたのであるが、その際、八左衛門家七代の安住（文政十三年五月七日辛、年七十）の輯録にかかる『系譜集録』所收の前記「金春家之書物之日記」に基いて、その書目の中から、當時存亡不明であつた『花鏡』・『已心集』・『翁之大事』等、及び既に明治四十二年二月に『世阿彌十六部集』に合刊した『風姿花傳』・『至花道』・『人形日記』（二曲三體繪圖）、更に現存する禪竹の著作『五音三曲』・『歌舞髓腦記』・『六輪一露之記』・『五音』（五音次第）等を順次消去して、最後に残つた『拾玉得花』を、天文年中の笛師中村親能の能舞笛祕傳書『金瑠落梅』中に收められた、康正二年九月二日金春氏信の署名ある一篇であると認めたのである。何となれば、「禪竹の奥に書ける和歌に、うかびいでて、かかるもくづの花もさけ、きよきなぎさの玉の光にとよめるに合せ考へて、確と悟らるればなり。句中に、花の開く、玉の光るといふは、やがて玉を拾ひ、花を得る意なること、明白ならずや。されば、今は題銘をば拾玉得花と押して、此に挿入す」といふのであつた。そして「其内容の五音十體は、世阿彌の五音説を廣めて、更に十體の説を立てたる者」とせられたのである。以來『拾玉得花』は常に禪竹著述として論ぜられ、吉田博士認定の本文を引用するのが例となつた。昭和七年六月野々村戒三氏新編の『金春十七部集』にも、禪竹篇には新たに『五音の能の心持の事』と『百ヶ條』の二部を増補した以外には、他はすべて吉田博士校訂の本文を再録し、これにやや詳しい頭注を加へるとどまつてゐる。そしてここでも、『拾玉得花』を禪竹作とし、吉

田博士認定の本文を再録すること、他と同様であつた。

しかし吉田博士が『拾玉得花』と認定したのは、實は應永二十七年三月世阿彌在銘の『音曲五位』(假題)の後半、「音曲習道五位音之次第」に、「十鉢の風姿」を添加したものであつた。川瀬博士は寛永頃の書寫と推定せられる虎菊三郎自筆本の轉寫本を紹介して、これは禪竹が世阿彌の「音曲五位」の説に、おのれの「十鉢」の説を附加したものであると説いたが、これに對して小林靜雄氏は、『拾玉得花』の前半後半共にやはり禪竹の著作であり、かつ新発見の『音曲五位』の作者も亦禪竹と認めるといふ反論を發表して争つた。この論争は、しかし、前に述べた金春氏綱の自筆書留の発見によつて、川瀬博士の勝利に終つた。けれども、問題は依然として後に持ち越された。何となれば、『拾玉得花』は世阿彌の著作であることが判明したものの、なほその正體は判らないからである。そこで川瀬博士は、吉田博士認定本は、その前半は世阿彌の「五位音之次第」、後半は禪竹の「十鉢之事」であると考へた前説を翻して、前半後半共に世阿彌の著作であつて、卷末に附せられた康正二年の禪竹の奥書を除いたものが世阿彌の『拾玉得花』の全容であると考へるに至つた。そして昭和二十三年三月に刊行せられた『注頭世阿彌二十三部集』には、康正二年の禪竹奥書の代りに、氏綱書留に見える『拾玉得花』の奥書全文を附けて、吉田博士認定本を三度収録してゐる。もつともそれは、多少の留保を附して、参考の意味に於て附載せられたのであつたけれども。

もし『拾玉得花』の正體が、果して川瀬博士所説の通りであるとすれば、それは世阿彌ならびに禪竹の能樂論について、從來考へられてゐたところを訂正しなければならぬほどの、大きな問題を提供することになるであらう。前半の音曲を祝言・幽曲・戀慕・哀傷・闌曲の五位に分つことは、新しく発見せられた『音曲五位』の後半そのままであり、それは更に『五音曲條々』や『五音』に敷衍發展せられ、禪竹に繼承せられては『五音次第』や『五音三曲集』の所説となつたこと、既に周知のところであるから、ここには特に取上げていふほどのものはない。ただ問題は、後半の十鉢の部分である。世

阿彌は『花傳第七別紙口傳』や『花鏡』・『世子六十以後申樂談義』などに、屢々能の十躰について言及するところがあつたが、その十躰の名目の一々は不明であつた。多分それは、『風姿花傳第二物學條々』にいふ老人・女・直面・物狂・法師・修羅・神・鬼・唐事の九項目を、おほよそに引つくるめて十躰の名を以て呼んだのであつて、『拾玉得花』の後半に見える、祝言・幽玄・戀慕・哀傷・闌・麗體・遠白體・濃體・有心體・事可然體の十體の如きは、歌道思想を能樂論に取入れた禪竹の考案になるものとせられてゐたのである。しかるに今、その『拾玉得花』の後半も亦世阿彌の作に成るものとすれば、世阿彌のいふ能の十躰とはかくの如きものであり、歌道思想を取入れて能樂論を展開することは、早く世阿彌に創まるころだつたといふことになる。川瀬博士は自説を裏づけるために、世阿彌が歌道に深く求めてゐた事實を證するものとして、世阿彌が禪竹に與へた傳書『六義』を擧げられた。これは九位の内の妙花風・寵深花風・閑花風・正花風・横精風・強細風を、おのおの風・賦・比・興・雅・頌の詩の六義に配當し、かつその心を『古今註』を引用して説明したものである。そして又十躰に關しては、『拾玉得花』とは獨立に、「十躰之事」だけを傳へてゐる金春安住筆録本・林氏喜手寫本の存在を指摘して、世阿彌著作としての可能性を強調せられた。ただその場合、安住筆録本・氏喜手寫本のいづれもが、禪竹の手を経て傳へられたものであることを、博士はことさらに軽く考へようとしてゐる。それは吉田博士認定本を以て、世阿彌著作の『拾玉得花』と認めようとする意識が、知らず識らずの間に働きかけたためであらう。ともあれ、さうした繁雜な考證の手續を必要としたといふのも、一に信賴するに足る證本が発見されなかつたことによるのである。そしてそれは、此度の金春宗家所藏本の發見によつて、世阿彌著作の『拾玉得花』は、吉田博士認定本とは全く内容を異にするものであるといふことが、新たに判明した。それでは吉田博士認定本は如何なる性質のものであつたかといへば、川瀬博士の最初の所説の如く、世阿彌の「五位音之次第」に、禪竹が自己の「十躰之事」を附載して一書を成したと考へるのが、最も妥當の説であるといふべきである。

前にも述べたやうに、金春宗家所藏本は世阿彌自筆の原本ではない。けれども、八左衛門安喜が書寫した他の傳書類の副本と同じく、金春宗家に傳はる世阿彌自筆の原本を出来るだけ忠實に寫しとつたものであることは、それが一子相傳の家傳印可の證として筆寫を許されたものであり、そして父の八郎安照がそれに奥書を加へて證明してゐることによつても明かである。もつとも子細に本文を點檢して行くと、世阿彌・禪竹の判まで模寫してゐるが、その一方では「稽古」の「稽」字を「秋」と「首」の二字のやうに書いたり、「休」を「体」に、「注」を「住」に、「勸」を「動」に、「木」を「來」に、「微」を「山」と「汲」の合字に、「暉」を「暉」に、「態」を「熊」に、「故」を「政」に、「末」を「未」に、「ら」を「ゝ」に、それぞれ誤つてゐる。最も多いのは「然」を「就」に誤り記してゐること、その外には「さるほとに」を二度重ね書いて、見せ消ちにしたところもある。これらは世阿彌自筆本の誤そのままであるか、或は筆寫の際に於ける安喜の誤であるか、いづれとも斷定することは出来ない。勿論安喜の誤寫が全くないとはいへないが、さうかといつて、全部が全部、安喜の誤寫だともいへないであらう。

又本文から奥書に至るまで、全卷にわたつて、朱を以て句讀を施し、假名を振り、漢字を宛て、行間に出典或は解釋を注記してゐるが、これも、世阿彌自筆本をそのまま寫したものであらうか、それとも後になつて加へたものであらうか。世阿彌が最初から自分の文章に一々讀假名をつけ、漢字を宛て、出典や解釋の注記をして與へるといふことは、まづ考へられないことであるから、これはやはり後になつて禪竹が加へたものであらう。禪竹は二十四歳の正長元年にこの書物を相傳して、四十九歳の享徳二年になつて、どういふつもりか、自分の奥書を加へてゐる。或はこの時、嘗て「若年之時師家」から相傳した本書を讀返して、その後の稽古によつて自得したところを書入れたのではないかとも考へられるが、しかしそれにしては、いまさら讀假名をつけたり、漢字を宛てたりする必要があるとは思はれない。かうした傳書相傳の手

續を明かにしないけれども、後世のやうに形式的になつてしまつた時代とは違つて、最初相傳の時には、師家から附與せられた自筆の原本を前に置いて、その読み方から字句の解釋、文章の意味まで講義を聞いたのではないかと思ふ。だからこれは、禪竹の書入れであるが、世阿彌がさういふ風に讀ませ、さういふ意味で書いたといふことを示してゐると考へてよいと思ふ。いづれにしても世阿彌自筆の原本の存亡が不明である今日、この金春宗家所藏本は、現在唯一の貴重な證本であるといはなければならない。

禪竹がこの書物を世阿彌から相傳したのは、彼が二十四歳の年の正長元年六月一日のことである。同じ年の三月九日には、前に言及した『六義』を附與せられてゐる。更に遡つて十五歳の應永二十六年の八月には、恐らく金春太夫になつたばかりの彼に、『音曲聲出口傳』が譲られてゐる。『音曲聲出口傳』と『六義』とは、いづれも禪竹の「懇望」もしくは「所望」によつて、世阿彌から相傳せられたのであるが、この『拾玉得花』は、「金春太夫藝能見所有依」つて、特に世阿彌から相傳せられたものなのである。勿論奥書の書き方は違つても、世阿彌から祕傳を相傳した事實に變りはないけれども、『拾玉得花』を附與せられた頃の禪竹は、その藝能の向上發展の可能性あることを、世阿彌から期待せられてゐたことが判るのである。もつと後のことであらうと思ふが、世阿彌の嫡子十郎元雅は、「こんはるならでは、當道の家名を、後世にのこすべき人躰あらず」といつて、世阿彌が「一大事の祕傳」としてゐた『花鏡』の一見を禪竹に許したといふことが傳へられてゐる。世阿彌自身も、「金春太夫、藝風の性位もたゞしく、道をまもるべき人」と認め、元雅早世後の永享九年八月には、一子相傳の『花鏡』を正式に禪竹に相傳してゐる。けれども正長元年頃には、いかに「藝能見所有」りとはいつても、家の掟を破つてまで、觀世の家の一子相傳である「花傳、年來稽古より物覺、問答、別誓、至花道、花鏡」等を相傳することは事情が許さなかつた。そこでそれらの傳書に説くところを要約して、別の形で禪竹に與へたのがこの『拾玉得花』である。



『拾玉得花』は、『花傳書』の「問答條々」と同じく問答の形式で、六ヶ條の問と答から成つてゐる。そして又、『問答條々』と同じく能の實演に即して、最も重大な問題である「花」の解明を志してゐる。その點では『花傳書』と共通したところがあるが、しかしその説くところは、「花傳、年來稽古より物覺、問答、別昏、至花道、花鏡」のすべてにわたつてゐる。つまりこれは、世阿彌能樂論の精粹である。精粹であるばかりでなく、世阿彌がこれまでに書いたり工夫公案を重ねて來たところを、最後に要約して書いたものであつただけに、その思想は成長圓熟の跡が見られ、その説明の仕方はより行届いた手に入つたものである。それは直接原文について、對話問答の進行を辿るうちに、自ら看取されるであらう。

問答の相手は誰か判らないが、少くとも禪竹ではない。恐らくこれは架空の人物であらう。そしてこの架空の人物を相手に、世阿彌自身が、多年の舞臺經驗を通して體得し又反省したところを、自問自答の形で展開して行く。かういふ對話の形式を彼は何から學んだのか知らないが、最も複雑難解な問題を或は表から或は裏から、手近かなところから次第に奥深いところへと、方角を變へたり適當に廻り道をしたたりして、説きほぐして行くのに適當な方法であるといつてよい。ところで對話のきつかけは、「その時その場所によつて、藝に出來不出來のむらを生じるのは何故だらうか」といふ、および舞臺に立つ者の誰もが經驗する、最も素朴な共通の疑問から始められる。

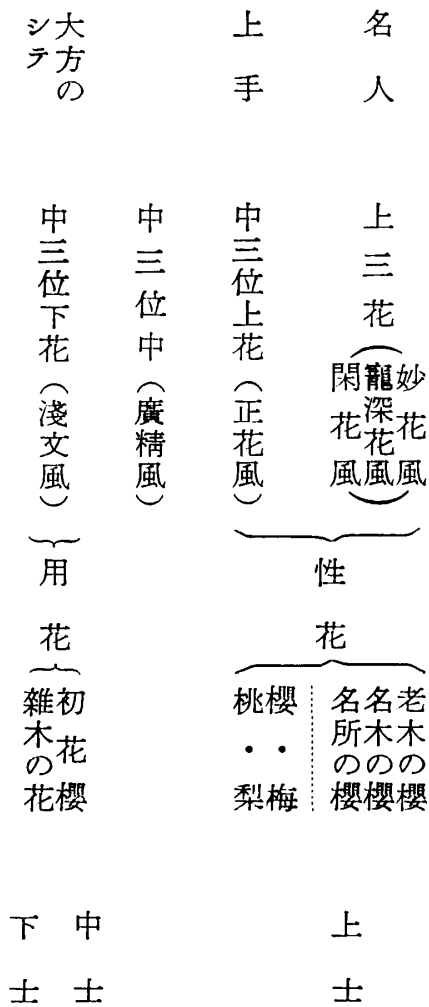
これに對して世阿彌は、「即座和合」或は「當氣和合」の成否が、その時その場所に於ける藝の出來不出來を左右すると答へる。そして「即座和合」を成就する方法として、陰陽の調和を考へて「當氣」に「我意」を念籠し、「時の調子」に衆人の心耳をひきよせ、「音曲の聲文」をなして「音感」から「見風」の幽玄に一座の感動を盛上げて行くことを説く。これは既に『問答條々』の第一に、「當日にのぞんで、先、座敷を見て吉凶をしる事」の項を設けて説いたところであり、更に『花鏡』に於て「一調・二機・三聲」・「先聞後見」・「時節當感ノ事」と標して細説したところでもある。随つてその説は從來より一步も出てゐないが、その説明の仕方は從來よりも一層詳しく、行届いてゐて親切である。

その時その場所によつて藝に出来不出来のむらを生じるといふことは、舞臺に立つ演技者の側の問題である。これを見所の観客の側からいへば、「同じシテの藝が、その時その場所によつて、面白かつたり面白くなかつたりするのは、何故であらうか」といふことになる。このやうに第一の問題を裏返して、見所の観客の側から考へたのが第二の質問である。

ここでも世阿彌は、最も身近かに、しばしば遭遇する立合勝負の場合を例に引いて、問題にしてゐる。即ち「年來稽古の劫を積んだ名人上手の藝も、それからまだ歌舞二曲の修行中で、物真似の稽古も出来てゐない童形の初心の藝も、どちらも同じやうに面白く感ぜられる時があるが、それはどうした譯であらう。その面白さは、果して同じ質のものなのであらうか」といふのである。この問題は、やや形を變へて、『問答條々』の第二に取扱はれたことがあつた。そこでは、「劫入りたる名人のシテが、ただ今の若シテに、立合勝負に負けることがあるのは何故か」といふことになつてゐる。これに對して世阿彌は、「時分の花」と「まことの花」の喩を持出して説明し、この「花を知る」ことが大切だといふことを説いた。そして『別昏口傳』では更に、「ハナト、ヲモシロキト、メヅラシキト、コレ三ツハヲナジコ、ロナリ」といふ「花の公案」を説明してゐるが、本書でも彼は「花」の問題を持出して説明してゐることは、從來と變りはない。しかし「花」は、シテの藝の「位」であると同時に見所の観客の「見風」である。演技者の藝の「位」に上・中・下の三品九等があるやうに、観客の身分にも上士・中士・下士の三階級がある。「上三花」（妙花風・寵深花風・閑花風）の名人の藝を面白やと見るのは、「上子（士）の見風」であり、「中三下位」（淺文風）の大方に得たるシテの藝を面白しと見るのは「下子（士）の見風」である。随つて名人上手の藝も童形初心の藝も、ひとしく面白いと見るのは、シテも見所も、「その分／＼の心眼」によるのだと説いてゐる。この點は從來より一步を進めた新しい考へとして、大いに注目しなければならぬ。

もつともこの考へは、今初めてここに現れたのではない。既にそれは『花傳書』の「奥儀」に、「目きき」と「目きか

ず、「上根上智の眼」と「遠國田舎のいやしき眼」とを分ち、又『花鏡』の「比判之事」にも「目利」と「田舎目利」とを區別して、見所の褒貶の沙汰に言及した箇所にも現れてゐる。しかしそこで問題になつたのは、「一座建立」・「壽福増長」のために、いかにすれば、この「遠國田舎のいやしき眼」にもげにもと思ふやうな能をして見せることが出来るか、そして「衆人愛敬」を獲得することが出来るかという觀點からであつた。随つてその説くところは極めて斷片的であつたが、本書では正面から面白さの質の相違を取上げて、シテの藝の「位」と觀客の「見風」とが互に相應するものであるといふことを、はつきりと述べてゐる。そしてそこに新しく考案せられたのが、「性花」と「用花」といふ術語である。これは或意味では今までの「まことの花」と「時分の花」とに相通ずるものを持つてゐるが、「花」によつてあらはされた從來のシテの藝の「位」についての比喩と觀客の「見風」についての比喩とを、一語にして綜合調和した、全く新しい術語である。即ち世阿彌の説くところを圖に示せば、次のやうになるであらう。



「性花」の「性」は、佛教では「體」の別名としても用ひられ、その意味では「用花」に對應する命名であると思ふが、時に「正花」とも記し、また「中三位の上花を、既に、正花とあらはすうへへ、櫻木なれ共」といつてゐるところを見る

と、これは連歌の「正花」と「正花ならざる花」の考へ方から導かれたものであらう。ただその場合、既に『九位』に於て中三位の上を「正花風」と命名した點から、これと區別するために「性」の字を選んだのではないかと思はれる。後年、禪竹が『六輪一露』を著して、世阿彌の『九位』を佛教哲學を以て再構成した際、上三花を壽・豎・住の上三輪に配當してこれを「性花」とし、中三位・下三位をそれぞれ像・破の二輪に配當してこれを「用花」としたのも、その基くところはここにあつたのである。

同じく面白いと感ずるのにも、そこに質的な相違があるといふことは、「花」の比喻によつて明かになつた。しかしさうした比喻分別をはたらかせる以前に、我々は一樣に面白いといつてゐる。「いつたいほんとうに面白いといふことはどういふことであるか」。問題はいよいよ藝術的感動の祕密の核心に迫つて行く。

これに對して世阿彌は、「以前申つる、面白と云、花と云、めづらしきと云、此三は、一躰異名也」といつて、既に『別昏口傳』に説いたところを繰返してゐる。しかし單なる繰返しに終らないで、更にこれを分析して、「妙」・「花」・「面白」の上・中・下三等に分つて説いてゐる。このところは極めて難解であるが、少くとも從來、同じ平面で「一躰異名」と考へて來た「面白き」と「花」と「めづらしき」とを、「上中下の差別」をつけて階層的に考へやうとしてゐることが知られる。即ち最も純粹な感動は、無我無心の境地に起る。それは言語を絶したもので、強ひていへば天台の釋にいふ「言語道斷不思議、心行所滅之處、謂之妙」である。別の言葉でいへば「無心の感」である。その時には、「面白い」とか「美しい」とか感ずる餘裕はない。ただもう「うれしき心」だけで、覺へず「微笑」するといふのが實情であらう。これが「妙」である。しかしその感動の陶醉から覺めて、その「面白さ」・「美しさ」を反省し分析する時、そこに「花」が現れて來る。或は「無心の感」に達しないまでも、批判の眼をはたらかせて舞臺の演技を見てゐる時、觀客の「その分くの心眼」に應じて、「花」を意識し面白いと感ずる。「上士」もしくは「目きき」には名人上手の「花」が、「中士」・「下

士」或は「目きかず」には大方に得たるシテの藝が、それぞれの「花」と映ずる。これが「花」である。けれども大部分の観客は、素朴にただ「面白い」といつて済ませる。彼等といへども、何か心に感得するところがある筈であるが、それを「面白い」の一語ですべて片付けてしまふ。これがいはゆる「面白き」である。「一點付る」といふのはよく判らないが、恐らく和歌・連歌の合點から來た言葉で、ちよつと批評する、感想を述べるといふほどの意に用ひられてゐるものと思ふ。

しかしながら、深いにもせよ淺いにもせよ、さうした観客の感動は、シテの藝によつて喚び起されるものである。随つてそれはシテの藝の「力」或は「位」と、全く無關係であるといふことは出來ない。既に九位第一に定位した「妙花風」を得た名人が、無心の境地に遊んで「舞歌の曲をなし、意景・感風の心耳をおどろかす」時、「おぼへず見所の感應をなす」のである。これをこそほんとうの面白さといふものであるといふ。これについては、『花鏡』の「事書十二ヶ條」の内の「上手之知感ノ事」が想ひ出される。既にそこで世阿彌は、「初心よりもしろき所のあるも有」といひ、しかし、「次第く上手のくらしいにいたれ共、をもしろきとをもしろきは又べち也。又をもしろきくらしいより上に、心にもをぼえずあつと云重あるべし。是は感なり」といつてゐる。これはシテの側からいつた言葉であるが、「面白き」といふ内容を分析して、階層的に考へようとしてゐることが注意せられる。そして更に、それをシテの藝の「位」に對應せしめて考へようとしてゐるのも、本書に先んずるものといふべきであらう。

面白さの極致は「無心の感」にある。その「無心の感」をなし、或は「無心の感」を持ち得る人といふのは、「妙花風」を得た名人である。ところで「稽古の條々」に、安き位といふことが見えてゐるが、これはつまり、無心の感・妙花の所と同じ意味なのであらうか。これが第四の質問である。ここにいふ「稽古の條々」とは、『花傳書』の「年來稽古條々」には「安き位」といふ言葉は見當らないから、これは『九位』の「九位習道の次第條々」を指していつてゐるのであらう。

そこでは「中初・上中・下後」といふことを説明して、二曲の稽古に淺風の文をなして、次第に廣精・正花と得法し、最後に妙花の「安位」を経てさて却來して、無心無曲に、自由に下三位の風にも遊ぶ境地に到達することを説いてゐるが、ここに述べるところはほぼそれと同趣旨である。ただここでは、中三位・下三位を習得したシテにも、「其の分／＼の安位」があることを認め、なまじいに「堪能妙花の藝人」の「安曲」を模倣することなく、その得たる分々の「安曲」の風體を演ずることを勧告してゐるのは親切である。これは『花鏡』の「事書十二ヶ條」の内「習道智の事」と相通する。そしてここに臨濟の「無位眞人と云文」を引き、同じく「悟々同未悟、悟了同未悟」の禪語を擧げ、自得慧暉禪師の『六牛圖』第六偈を引用してゐることは、やや注意するに足ると思ふ。

次に「一切萬道成就」といふ言葉は、世阿彌のどの傳書にも見當らない言葉であるが、多分それは、遊樂は一切の萬道を成就するものだといふ、世阿彌の理想を現した標語であつたと思ふ。ところで問者は、「これはただ字面の通りの意味であるか、それとももつと深い意味があるのであるか」と問ふ。これが第五の質問である。世阿彌はこれに對して、やはりこれも「面白き心」と關係があるといふ。いふ心は『花傳書』の「祕義」に、「抑々藝能と者、諸人の心をやはらげて、上下の感をなさん事、壽福増長のもとひ、かれい延年のほうなるべし。きわめく／＼ては、諸道悉に壽福延長ならん」といふところと、同一趣旨に出るのであらう。そしてその成就について大切なことは、「序破急」であると説く。「序破急」が成就せられるところに、「萬曲のおもしろさ」が成就せられ、「萬曲のおもしろさ」を得て初めて、「一切萬道成就」の藝能の理想が實現せられるのである。「序破急」については、既に『花傳書』の「問答條々」や『花鏡』の「事書十二ヶ條」其他に、繰返し説いてゐるところである。それらはいづれも能の演出の時間的進行について述べてゐるのであるが、ここではこの原理が、「萬象森羅、是非大小、有生非生」のことごとくに具はるものであり、そしてそれがいはゆる「あはれ」をもよほし、「おもしろき心」を動かす根源であるとする點で、從來よりも更に徹底してゐることを知るのである。

最後の質問は、第五の「安き位」についての質問と關聯がある。「人おのおのその藝に我が得たるところがあるが、その我意分について何か別に注意するところがあるか」といふのである。これに對して世阿彌は、九位の上三位・中三位・下三位それぞれに、その得たる位があり、その得たる位に任せて演ずるのが「我意分」といふものであるが、それはただ我が得たりと思ふところを「おしあてがいに事をなさんと」することであつて、「眞實の我意分」といふことは出来ない。「眞實の我意分」とは、「舞歌の二曲」を十分に習得し、老・女・軍の三體はもとより、鬼神・物狂ひの風體に至るまで、その性根を究め盡して、これを似せるといふよりもこれを自分のものにこなしきつて、そのものになりきつてこそ、初めて「我意分」を盡すといふことがいはれるのである。これを「誠の物まね」とも「有主風」ともいふ。その境地を「安き位」といひ、「定位本風の我意分」といふのである。このことは既に、『至花道』の「無主風事」や『二曲三鉢繪圖』などに詳説したところであつた。

以上これを要するに、本書は「花傳、年來稽古より物覺、問答、別帯、至花道、花鏡」等の家の祕書を相傳する代りに、その要を拾つて、花の奥儀を禪竹に傳へたものである。『拾玉得花』の題號は、實にそこに由來する。そして本書は、世阿彌としてはそれらの書物の成つた後に書いたものであつただけに、その思想は圓熟し、その説くところ周到であり、しばしば見るべき新見のあること、前に述べた通りである。その意味に於て、本書發見の意義は極めて高く評價せられなければならないと思ふ。因みに終りに當つて、本書の披見を許された金春宗家、ならびにその仲介の勞を執られた金春文學士に對して、厚く謝意を表するものである。

#### 註

(1) 金春文學士は、その卒業論文「拾玉得花について」に於て、金春宗家所藏に世阿彌作と推定せられる『拾玉得花』の傳本の存在することを報告してゐる。しかし右卒業論文に扱つたのは、世阿彌の『拾玉得花』が

世阿彌の「拾玉得花」について（野間）

主題ではなく、専ら吉田博士認定本を中心として、禪竹の「五音十鉢説」を究明したのであつた。

(2) 「世阿彌著作『音曲五位』の發見」昭和十六年二月發行雜誌「實生」第二十卷第二號、昭和十八年六月「日本書誌學之研究」再録。

(3) 「音曲五位の著者」 昭和十六年四月發行雜誌「潮世」第十卷第四號、

(4) 「拾玉得花は世阿彌の著作」 昭和十六年十二月發行雜誌「寶生」第

十卷第十二號、後に「日本書誌學之研究」再録。

(5) ただ一箇所、即ち第三問の「無心の感」の説明に『易經』の一節を引

用した部分だけは墨書である。これは世阿彌の原注であるか、それとも他の朱注と同じく、禪竹の後注であるかどうか、不明である。注記については猶研究の必要があるが、禪竹の著書にしばしば現れて来る同一の語句があることは、注目に値する。

### 拾玉得花

・問・遊樂成・於・當藝・年來のたしなみの條々・意曲をつくし・成功をつみて・我意分の藝能をいたす事・ゆるがせならずと云へ共・即座によりて・出來時イテケも有アリ・又出イテこぬ時トキも有也・故如何ユエイカナルそや・答・諸藝シヨウイの當座タウサニおいて・出來・出不來イテコサル甲カウ乙イチ有アリ・是コレちからなき時節シセツと申マウなから・稽古安心ケイコアシンをなさハ・なとか・出シユツ・不出フシユツの・其ソノゆへをしらざらん・是コレ・なをもたしなミの・不及フキキにして・おろそかなるゆへかとおもふ」(二オ)とところに・同上手ドウシテ・同藝風ドウゲイフウをなす當座タウサにも・なとやらん・昨日ケノハ出來イテキ・今日ケノハ出不來イテコヌ見風有ミフウアリ・さりとてハ・風月延年フウゲツエンネンをなす藝ゲイの身ミにてハ・かなハざらんまでも・くふうして・不審フシンをひらかん事・本意ホンイなるへし・抑同上手オクドウシテ・同堪能ドウカンノウをきわめたる・曲風キョクフウの・當座タウサによりて・甲乙カウイチの有アル事コト・若モシ・おりふしの時分シフン・陰氣インキ・陽氣ヤウキの・和ワせぬ所トコロなるか・四氣シキおりく・日夜ニチヤ・朝暮アサボ・きせんくんじゆの・他少タセウ・廣座クワウサ・少座セウサの」(一ウ)當氣タウキによりて・藝人ゲイジンの・時機音シキヤウオン・時の調子トキノテウシの五音イ・相當サウタウせすハ・當氣タウキ和合ワカウあるへからす・先マツ・當日タウの氣キに・我意カイを念ネン籠ロウしあはせて・音聲オンシヤウの曲文キョクモン・時の調子トキノテウシニうつり合アイて・數人シユニンの感音カンオンをなさん事・即座和合ソクサワカウの入門ニウモンナリ也・又・暖氣ウンキ寒氣カンキ・日夜ニチヤ・朝暮アサボの・時節シセツに和ワする・音感オンカンなるへし・寒カンハ陰イン・暖ウンハ陽ヤウの時トキなれハ・陰氣インキニハ・陽ヤウを和ワし・陽氣ヤウキニハ・陰インをあわせて・聲感セイカンをあてかふへし・陰陽和インヤウワする者モノ」(二オ)自然シゼン・座幾ザシキ(敷)の天氣テンキ・陰氣インキなんとなにて・物さひたるけしきならハ・陰氣インキそと心得ココロエて・陽聲ヤウセイ・永曲エイキョクを・相音アイオンに・体キツ(休)息ソクして・音感オンカンをなすところ・是コト・一座成就サシヤカシユの・感應カンオウ也其感應ソノカンオウより・見風ケンフウにほふ・躰風タイフウ向ムカフ江月照松風吹エノキ本夜清聲ホンヤシヨウ所作ソクサ・爰ココ・面白オモシロシと見る數人シユニン感應カンオウ也・如此曲感キョクカンに・和ワする成就シヤウシユをや・出來イテキタルる・時分シフンと申マウへき・又・當座タウサ・陽氣ヤウキかと思オモフ時トキハ・音



聲シヤウに・息イキをつめひらきて・陰聲インセイを・躰タイにして・調感テウカンをもよほして(一ウ)・數人シュニンの心耳シンニを・ひきよせ・ひきをさめて・音力オンリキをなすへし・又・たとひ・秋暮シュホ・三冬陰氣サントウインキなりとも・若ニウ・當時トウジの日頭ニツトウもうらゝに・見物衆ケンブツもくんじゆしたる・當座タウサにて・人氣ニシキ・人音ヒトオトなんとのミにて・シミかねたる當庭タウバにも・相音アイオンの高聲カウシヤウをもて・數人シュニンの心耳シンニニ通せしめて・爲手一人シテッへ・諸人シヨニンの目心メクシンをひき入て・其連聲ソノレンシヤウより・風姿フウシにうつる遠見エンケンをなして・萬人マンジン一同トウの感應カンナウとなる・褒美ホウビあらハ・(二オ)一座成就サハクワンの遊樂ユウラクなるへし・是まづ・音感オンカンの入門ニツモンより・見風ケンフウにうつる堺サカイなるへし・花鏡カウキヤウに・先聞後見センモンゴケンと住ヂウ(注)したるハ此心也・此あてかひハ・貴所廣座キシヨクワウサ・少座セウサ・庭前テイゼン・屋内ヤナイ・ないしかりそめの座式ザシキの・音曲オンキョクなんにいたるまでも・其時キトキくのもやうによりて・あてかふへき事コト・すこしもたかふへからず・動カウ(勸)進シン・大庭タイハの申樂シンラクハ・天地人テンチニジンの三才サンサイの氣キニ通じ・庭申樂テイシンラク内能ナイノウなんとハ・人氣ニシキの躰タイ(三ウ)のミにて・天氣テンキハ用ユウになる事あるへし・如此ノの當座タウサくくをあてかいの・安アン・不安フアンの差別シヤツによりて・出シュツ・不出フシユツの・甲乙カウヤウもあるかとおほえたり  
○外道佛二問タテマツル昨日イカナル法ヲトキ給シ世尊云ク定法ヲトケリ○又云今日ハイカナル法ヲトキ給フ  
○世尊云ク不定法ヲトケ○又云今日ナニトテカ不定法ヲトケ給○世尊云ク昨日ノ定法ハ今日ノ不定法ナリ  
 ・問マコトニソノ・誠マコトニソノ・其おりきげんによりて・出シュツ・不出フシユツの甲乙カウヤウあるへき事うたかないなし・此藝道ケイダウに・稽古長久ケイコチヤウキウにして・既に・名ナをうるくらいになりて・おもしろやとおもふ見感ケンカン・是ハ成功セイコウなりと見る所に・二曲ニキョクの位ライ・いまたがんぜん・初心シンシンにて・正マサニ(四オ)・兒姿コシ・遊風ユウフウの時分シブンにも・おもしろやと見る事あり・是ハ・成功セイコウの達人タクシンの・おもしろきと・おなし心なる位ライやらん・是不審コレフシなり・答コタヘ・此段コノダンハ別番ヘツバンにあり・面白心オモシロキを・花ハナにたとへたり・是・めつらしき心也・この心をきわむるを・花ハナをしると云り・花傳ハナデンにみえたり・抑ヨメ・花ハナとハさくによりておもしろく・ちるによりてめつらしき也・有人問アルトウ云・如何無常心イカナルカムシヤウシン・答コタヘ・飛花落葉ヒカワラクヨウ・又問コタヘ・如何常住不滅シヤウヂウフメツ・答コタヘ・飛花落葉云々(四ウ)面白オモシロキとみる即心ソクシンに・定意テイイなし・さておもしろきを・諸藝シヨクイにも・上手ウマシと云・此おもしろさの長久チヤウキウなるを・名ナをうる達人タクシンと云り・然者シカレハ・おもしろき所を・成功セイコウまでもちたる爲手シテッハ・飛花落葉ヒカワラクヨウを常住シヤウヂウとミンかことし・しかれ共トモ・又大かたの花を・見するしてあるへし・既に・九位クウイとたて・上三花ウサンカハ申コトニ不及フヨハム・中三下位チュウサンゲイの藝ゲイにも・おもしろき所あらハ・又その分マくの花なるへし・假令ケリヤウ・雜來サウライ(木)・なんとの花をハ・田夫テンフ

野人」(五才)とうのおもしろと見ん事・是・下子の見風なるへし・上三花をおもしろやとミンハ・上子の見風也・爲手も  
見所も・その分々の心眼也・爰ニ・私のあてかいあり・性花・用花の兩條を立たり・性花と者・上三花・櫻木なるへ  
し・是・上土の見風にかなふ・位也・中三位の上花を・既に・正花とあらハすうへハ・櫻木なれ共・此位の花ハ・櫻木に  
もかきるへからず・櫻・梅・桃・梨なんとの』(五ウ)色々の花木にもわたるへし・ことに・梅花の・紅白の氣色・是又・  
みやひたる見風也・然者・天神も御やうかんあり・又云・當通の感用ハ・諸人見風の衰見をもて・道とす・さるほとに・  
此おもしろしとみる事・上土の證見よ(ママ)り・然共・見所にも甲乙あり・縦ハ・兒姿遊風なんとの・はつ花さくらの一  
重にて・めつらしくみえたるは・是用花也・これのミおもしろしと・衰見するハ・中子」(六オ)下子とうの目位也・上土  
も一たんめつらしき心たて・是にめづれ共・誠の性花とハみす・老木・名木・又ハ・吉野・志賀・地主・嵐山なんと  
の・花ハ・既ニ・當道に縦ハ・出世の花なるへし・かやうなるをしるハ・上土也・上下方ミン・一同に諸花ほうひの見風  
なるへし・上土ハ・廣大の・眼なるほとに・又餘花をもきらふ事あるましき也・爲手も又・如此・九位・いつれをものこ  
さ・らんをもて・廣』(六ウ)覺の爲手とハ申へし・方法一ニきす・一いつれの所にかきす・方法にきすと云々・如此その  
分々に依て・自然に・おもしろき・一躰くのあらんをハ・諸花と心うへし・しかれ共・兒姿のおもしろさと・成功  
の・達人の・おもしろさも・同心かとの不審をひらかんかため・性花用花の差別を申分る也  
・問・抑・此面白と名付そめし・所得・何故そや・花と見」(七オ)るもたとへならは・たとへすしらぬ所に・面白と云は  
しめし本来如何・答・是ハ・既に・花をさとり・奥義をきハむる所なるへし・以前申つる・面白と云・花と云・めつらし  
きと云・此三ハ・一躰異名也・是・妙・花・面白三也と云へとも・一色にて・又上中下の・差別あり・妙者・言語を絶て  
・心行所滅也・是を妙と見るは花也・一点付るは面白き也・夫・面白と名付之事・天香久山の・神樂の・』(七ウ)遊樂ニ  
めて給ひて・大神・岩戸を・ひらかせ給ひし時・諸神の面・ことくくあさやかに見えそめしをもて・面白と名付そめ

られし也・其きハをハ・おもしろしとも云へからず・面白とハ・一点付たる時の名也・一点不付・以前をハ・なにと云へき・爰ニ・當道の安心によせて・是をみるに・遊樂の面白とみる・即心ハ・無心の感也ハ・無心感とハ易ニハ・誠感應の即心ニカヘ成とはりしニヨリ云よませたりと云

抑・大神・岩戸をとちさせ給て・世海國土・とこやミとなて」(八オ)りやうあんなりしに・おもはずに・明白となる切心ハ・たゝうれしき心のミカ・觀喜なるへし・是・おほえすして・涙(微)笑する機なるへし・岩戸をとち給て・りやうあんにて・言語を絶たりしハ・妙・既に・明白となるハ花・一点付るハ・面白なり・就(然)者・無心の感・即心ハたゝ・觀喜のミカ・おほえす涙(微)笑する機・言絶(語)絶て・正ニ・一物もなし・爰を・たえなると云・たへなりとうる心妙花也・さてこそ・九位第一にも・妙花をもて・金性』(ハウ)花とハ定位し侍れ・舞哥の曲をなし・意景・感風の・心耳をおとろかす堺・おほえす見所の・感應をなす・是・妙花也・是面白也・は無心成(感)也・此・三ヶ條の感ハ・正ニ・無心の切也・心ハなくて面白とうけかうハ・なん物そ・性ハ物をうけかはす・就(然)者・九位金銀性ハ・見風の曲文ニハ・感すへからず・心うへし・おほえすして涙(微)笑するハ・うれしきのミ也・月菴和尚云・うれしき事ハいはれざりけり」(九オ)この上を・人々に次せられけると也

問・稽古の條々に・やすきくらいと云り・是ハ・無心の感・妙花の所と同意なるへきやらん・答・是ハ安心也・たゝ無心の感・妙花同意也・さりながら・其位の・有主風を得こそ・眞實の・やすきくらいなるへけれ・無位眞人と云・文あり・形なき位と云・たゝ無位を・誠の位とす・是安位・當道も・花傳・年來稽古より・物覺』(九ウ)問答・別昏・至花道・花鏡・如此の條々を習道して・奥藏をきかめ・達人になりて・なにとも心のまゝなるハやすきくらいなるへし・就(然)云へ共・猶も是ハ・稽古を習道したる成功の安位也・しからハ無心とハなをも申かたし・抑・安位者・意景・態相ニ・全くかゝらぬ所あるへし・其時ハ・稽古・習道をつくしつる條々・心中に・一物もなし・一物もなきと云も・又・習道の

○爰ニ九位中三位達ノ位得テ上三花名曲也中初上中下後次第

成功力也・恆(悟)く・同(十オ)未子(悟)云・自得(暉)和尙云・命根斷處・絶後再甦・隨・類・受・  
 身云く・又云・糲(精)金・火裏逢・不變・皓玉・泥中有・果如云リ・此藝如此・中三位より・上三花をきわめぬれ  
 ハ・下三位ましはるも・其爲手の位・上三花の定位のまゝなるへし・是・砂の金・泥に連(蓮)花・ましはるともそむ  
 (へ)からす・此位の・達人をこそ・眞實の・安位とも云へけれ・是万曲をなすとも・心中に・やすしとたにもおもふへか  
 らす・無曲・無心の(十ウ)當熊(態)なり・此位をや・本無妙花とも申へき・就(然)ハ・堪能・妙花の藝人の・此安  
 曲を・なすをみて・初心のして・やすき所をまなはん事・天に手をあけて・月をうたんとせんがごとし・なをし・中下三  
 位とうの爲手までも・心うへし・さりながら・九位においてハ・中三位とうを習得したらん爲手ハ・其分くの安位にい  
 たり・下三位の分藝ハ・又その・分力の・安位をなさん事・是又・しさいあるへからす(十一オ)たゝその・一躰くを得  
 たらん曲藝ハ・又その・分くによりて・安曲の風躰・遠見をなさん事・藝道の感用たるへし  
 ・問・一切・万道・成就云・是はたゝ・自面のことくか・又深き有か・故如何・答・成就とハ・なりつく也・就(然)  
 ハ當道においてハ・是もおもしろき心かとみえたり・この成就・序破急に・當り・故如何となれハ・なりつくハ落居なり  
 ・くなくしてハ・心く成就あるへからす・見風成就する(十一ウ)面白切也・序破急・流連ハ・成就也・能く安見する  
 に・万象・森羅是非・大小・有生非生・ことくく・おのく序破急をそなへたり・鳥のさへつり・虫のなく音にい  
 たるまで・其分くのことハりをなくハ・序破急也・しかれハ・おもしろき音感もあり・あはれをもよほす心も有・是成  
 就なくハ・おもしろしともあはれさともおもふへからす・抑・當道の藝能ニ・序破急の事・花傳・花鏡に(十二オ)くわ  
 しく見えたり・先・申樂の當庭番數みちて・諸人・一同のほうひをうるハ・其日の・序破急の成就の政(故)也・是目出  
 たき落居也・如此大かうの見物・諸人一同の目前・感應の成就也・又・其・番敷の次第く・一ばんつゝの内にも・序破  
 急成就あるへし・又・一舞一音の内にも・おもしろきハ・序破急成就也・舞袖の一指・足踏の一響にも・序破急あり・是

ハ・筆作ヒツサツに不及アホハス・口傳クハツ』(十二ウ)有アリ・面白オモシロハ見所ケンシヨ一見ケンの序破急オクハヤシ・成ナスところの一風フウハ・藝人ゲイジンの序破急也オクハヤシナリ・見所ケンシヨ人ヒトの・あつと感カンする・一音イチオンにも成就ジュウジツ有アリ・時節ジセツの感カンにも・其ソノ・一音イチオン・五音ゴオンにかなうハ・呂律リョリツの序破急オクハヤシなるへし・若モシ・一音イチオンのうちなりとも・うたるなから心ココロもなくて・音感オンカンと、かすハ・面白オモシロかるましき也ナリ・それハ序オク〇までにて・急キウにハおさまらぬ聲流セイリウなるへし・まして成就ジュウジツなにかあらん・さるほとにさるほとに・面白オモシロかるましき也ナリ』(十三オ)此意コノイを得ユすハ・曲心キョクシンの序破急オクハヤシも成就ジュウジツあるへからず・私シ云ク・一調イツテウ二機ニキ三聲サンセイも・調子テウシをふくむハ序オク也ナリ・機キを出すハ破也ハ・既スナニに出聲急也シユツセイキウ・此三ミツ・心耳シンニに感カンをなし・面白オモシロハ成就也ジュウジツナリ・就ツ(然)者ナリ・万曲マンキョクニ通ツウして・一風フウ・一音イチオン・一彈指イツタンシの機キにあたるも・序破急成就也オクハヤシジュウジツナリ・莊子シュウジ云ク・鴨カモのはきみしかくとも・つかツカハうれへなん・鶴ツルのはきなくとも・きらハかなしミなん云ク・長短チャウタン・大小タイセツ・平同ヘイトウにして・おのく』(十三ウ)序破急同オクハヤシドウ・此意コノイを所得ソクドクせは・我意ガイも・序破急成就なるへし・同ドウ・我ワか・曲風キョクフウの是非セイヒをも・分明フンメイにするべし・しからは是セハ・相足サウソク・非ヒを知シて・是コノをさらハ・一藝イツギ無上ムジョウの・堪能カンノウなるへし・此時コノトキこそ・心性シンシヤウの・序破急も成就ジュウジツ・見得ケントクすへけれ・たゝ・万曲マンキョクのおもしろさハ・序破急成就の故ユエと知シルへし・若モシおもしろくなくハ序破急オクハヤシ・不成就フシヤウシユとしるへきなり・おそれくハなを此心コノココロ・得事ドクジ如何ニカニ・奥藏オウサウ心性シンシヤウをきハ』(十四オ)めて・妙見メウケンに至イタリハ・是コノを得ウへき歟ナリ能ニ安得アントクノ見所ケンシヨ所數ソコトウ見所ケンシヨ數スウ面白オモシロ成就也ジュウジツナリ是コノ上ウヘ云ク面白オモシロ成就也ジュウジツナリ下シモ云ク面白オモシロ成就也ジュウジツナリ云事クニコト・當道タウダウの藝能ゲイノウに・心ココロうへき事コトおほし・先九位マツクウイにおいてハ、上三位ウヘサウイをえたらん爲手シテハ・其風躰ソノフウタイをなさん事コト・我意分ガイイフンなるへし・是既ハナテに・上果ウヘクワなるへし・中三位チュウサウイハ・又マタそのかいふん也ナリ・下三位ゲサウイとうみなく』(十四ウ)そのくらゐを得ユたらんにまかせて・我意分ガイイフンあるへし・みな・是コノまでと心ココロえたるはかりにて・眞實シンジツの・我意分ガイイフンにわたる所トコロをしらす・誠マコトの物モノまねに・入イふさすハ・このがいふんをうる事コトあるましき也ナリ・先マツ・三躰サンタイにおいて・老躰ラウタイの物モノまねをなす事コト・人形ニンギヤウ云ク・閑心カンシン・遠目エンモクと名付ナツケけたり・心ココロしづかにして・目メをとをく見よと也ナリ・是コノ・老躰ラウタイの風躰フウタイ也ナリ・是コノによく身ミなりをも・心ココロをもなして・さて二曲ニキョクを』(十五オ)いたし・立タテふるまう人躰ジンタイをも・それになりかへりて・藝風ゲフウをいたさハ・是コノ老躰ラウタイの我意分ガイイフンなるへし・又マタ・女躰メノタイハ・

心ヲ恣ニ能成サハ即カハスクルヘシ

チカラ

ゴト

躰心捨力と名付・心を躰にして・力をすつるあてかいに・誠に成かゝりて・さて・二曲をいたさハ・是又女躰のかいふん

也・又軍躰・躰力碎心と名付・力を躰にして・心をくたく所を・よく／＼心人にあてかゝるて・さて・その熊(態)をなさ

ん事・是・軍躰の我意分なるへし・軍躰ハ・凡・しゆらの』(十五ウ) 風躰なれハ・はたらきと者・きうせんをたいし・う

つ手・ひく手・うけつそむけつ・身をつかいて・あしふミも・さそくをつかふ心根をもちて・さて・人ないをハなたらか

にして・事をハなして・さてあたるましき塚を・よく／＼心えて・はたらくへし・是・軍躰の我意分なるへし・是を・や

ゝもすれハ・あしく心得て・軍躰の躰力碎心の身のまゝにて・又・女躰なんとなる時・躰心捨力をハあてかハすして・

た、女とならハ身を』(十六オ) うつくしくせんとおもふはかりにて・にわかにな女ニ似するほとに・人躰なへて・どちつか

すなれハ・正躰なき風躰になる事あり・それを見所の人・なへたるぞ・よはきぞなんどいさむれハ・又もとの・軍躰の心

人へかへるほとに・あらくなる也・是らをはなにとて・女躰の我意分とハ申へきや・た、よのつねの女も・女に似せんと

ハおもふへからす・もとより女人と生付たるまゝにて・上らうハそのふるまい・下』(十六ウ) 女ハその分にて・おの／＼

のふるまいをいたす事こそ・がいふん／＼のふるまひなれ・わざと身をうつくしくなさんとたくミ・ゆふけんならんとあ

てかふ事・かなふましき事也・かやうなるしてハ・あらきぞといへハ・た、・せず・などせぬぞと云へは・あらくなる也

・すへき事をするうちにてこそ・つよきも・よはきも・是非の・ひはんもあるへけれ・就(然)者・女すかた・男躰の似

事とハ・一大事なるほとに・躰心捨力と・形木を』(十七オ) をきて・其心人になりかへる風姿・是・女躰の我意分也・そ

のあてかいはなくて・た、・女に似せんとはかりハ・女躰のかいふんにてハあるましき也・女を似するハ・女ならず・さ

るほとに・女姿の有主風に・眞實なりてこそ・女のがいふんにてハあるへけれ・此・分目よく／＼心うへし・老躰も又・

如此・閑心遠目を心えて・その分に成入たらハ・老躰のかいふんにてあるへし・三躰いつれも・如此・又物くるいなんと

の』(十七ウ) 事ハ・はちをさらし・人目をしらぬ事なれば・是を・當道のふし物に入へき事ハなけれ共・申樂事とハ是な

心ヲ恣ニ能成サハ即カハスクルヘシ

チカラ

ゴト

躰心捨力と名付・心を躰にして・力をすつるあてかいに・誠に成かゝりて・さて・二曲をいたさハ・是又女躰のかいふん

也・又軍躰・躰力碎心と名付・力を躰にして・心をくたく所を・よく／＼心人にあてかゝるて・さて・その熊(態)をなさ

ん事・是・軍躰の我意分なるへし・軍躰ハ・凡・しゆらの』(十五ウ) 風躰なれハ・はたらきと者・きうせんをたいし・う

つ手・ひく手・うけつそむけつ・身をつかいて・あしふミも・さそくをつかふ心根をもちて・さて・人ないをハなたらか

にして・事をハなして・さてあたるましき塚を・よく／＼心えて・はたらくへし・是・軍躰の我意分なるへし・是を・や

ゝもすれハ・あしく心得て・軍躰の躰力碎心の身のまゝにて・又・女躰なんとなる時・躰心捨力をハあてかハすして・

た、女とならハ身を』(十六オ) うつくしくせんとおもふはかりにて・にわかにな女ニ似するほとに・人躰なへて・どちつか

すなれハ・正躰なき風躰になる事あり・それを見所の人・なへたるぞ・よはきぞなんどいさむれハ・又もとの・軍躰の心

人へかへるほとに・あらくなる也・是らをはなにとて・女躰の我意分とハ申へきや・た、よのつねの女も・女に似せんと

ハおもふへからす・もとより女人と生付たるまゝにて・上らうハそのふるまい・下』(十六ウ) 女ハその分にて・おの／＼

のふるまいをいたす事こそ・がいふん／＼のふるまひなれ・わざと身をうつくしくなさんとたくミ・ゆふけんならんとあ

てかふ事・かなふましき事也・かやうなるしてハ・あらきぞといへハ・た、・せず・などせぬぞと云へは・あらくなる也

・すへき事をするうちにてこそ・つよきも・よはきも・是非の・ひはんもあるへけれ・就(然)者・女すかた・男躰の似

事とハ・一大事なるほとに・躰心捨力と・形木を』(十七オ) をきて・其心人になりかへる風姿・是・女躰の我意分也・そ

のあてかいはなくて・た、・女に似せんとはかりハ・女躰のかいふんにてハあるましき也・女を似するハ・女ならず・さ

るほとに・女姿の有主風に・眞實なりてこそ・女のがいふんにてハあるへけれ・此・分目よく／＼心うへし・老躰も又・

如此・閑心遠目を心えて・その分に成入たらハ・老躰のかいふんにてあるへし・三躰いつれも・如此・又物くるいなんと

の』(十七ウ) 事ハ・はちをさらし・人目をしらぬ事なれば・是を・當道のふし物に入へき事ハなけれ共・申樂事とハ是な

り・女なんとハしとやかに・人目をしのふものなれば・見風ケンフウにさのミ見どころなきに・物くるいになぞらへて・舞マユをまい  
 ・哥カをうたいて・きやうげんすれば・もとよりミやひたる女すかたに・花をちらし・色香イロカをほどこす見風ケンフウ・是又なにより  
 もおもしろき風姿フウシ也就レハ（然）者この」（十八オ）くらいをゑたる爲手シテハ上花なるへし・是・おもしろきかいふん也・又・三  
 躰ホカの外キシシタイ・鬼人躰キシシタイなんとハ・是又さるがく事の似事也ニセ・誠マコトの・鬼オニを見事ミルあるましき也・假令ケリヤウゑにかける鬼人躰キシシタイなども・似  
 すへきかたちハなし・さるほとに大かたをあてかいて・あらかるへき道理タウリをはづしてその・はたらきをこまかに和ワて・人  
 目をばかすこしつ分のふんりきカ・鬼人躰キシシタイの我意分也ニセ・是を・碎動風サイドウフウと』（十八ウ）名付ナツケ・又・形鬼心人キヤウキシンジンとも云・此あてかいて  
 ・能ヨク安得アントクして・其分曲フンキョクをたしくせん事・碎動サイドウの我意分なるへし・如此カス・數カズの物まね・二曲の習道シユタウ・ことくくいつ  
 ハりもなく・藝躰キタイク（道）をなさん事・其・曲マクの我意分なるへし・其・あてかる・分目ワケメハなくて・た・おしあてかいて  
 事をなさんとせんをハ・我意分とハ申かたし・さるほとにハ・形木カタキの定意チャウイなきがゆへに・能ヨクにあち』（十九オ）わひ  
 なくなりて・老來ラウライニ成行ニナリユクま・能ヨクは下るへし・心うへき事也ココロウヘキコト・大學ダイガク云・其本亂末ソノモトミダシス（末）不治オホマラス云・物覺モノサトの其人躰ソノシシタイによりて・  
 能ヨク・似ニセおさむるハ・是ソノモト・其本也ソノモト・それが誠マコトにおさまらずして・似事ニセコトの曲躰キョクタイ・ゆるがせならハ・有主風ウシユにハあるへからず  
 ・就シカレハ（然）者ソノモトミダシ・其本亂也ソノモトミダシ・未スエ（末）・可不治オホマラス・又・果不及オホマラス云り・すぎたるハ・をよばざるにおなしと也・物まねの其  
 躰ホカ・すこしもたらさらんも・あまりたらんも・其本ソノモトにてハ』（十九ウ）あるへからず・此・有主風ウシユに・眞實シンジツ・成入ナリイルならハ・  
 似ニセとおもふ心アルヘカラス・又・不可有アルヘカラス・是を・誠マコトの物まね・有主風ウシユとハ云へきなり・此曲躰キョクタイの態風タイフウニ入ふしたらんをこそ・定位本風テイテイホンフウ  
 の我意分カイイブンとハ申へけれ・孟子マウシ云スル・不固コトノカタキ・能ヨク爲固コトノカタキ云スル・習ナラニスル似る事ハ・大かたしさいもなく・見風ケンフウなた・（ら）かなる  
 ハ・する事のかたきにあらぬ分也シンシツ・眞實シンジツ其物に成入ナリイルて・名をうる事ハすくなし・是・能ヨクする』（二十オ）事のかたきなるへ  
 し・似ニセたる事類ハ不齊此知所ハ似ニセたれとも・是セなる事ハせならずと云・此是セをよく安位アンイして・達人長名タツシンチャウメイの・其物モノに・至イタらん事を・可  
 得ヘ

此一帖・當藝習道之祕傳也・爰・金春大夫・藝能見所有依・爲・相傳・所・如此

・正長元年六月一日

もしほ草かきをく露の玉をミハ

見かくこと葉の花ハつきせし

・世阿(花押)〔(二十一オ)  
ハンマテウツス

此一帖若年之年師家之傳所也

享徳貳年八月日

氏信(花押)  
セシチクノハンマテウツス

もしほ草の花も玉も、かきあつめ

見れば鏡のうらもくもらす

金春八郎  
秦安照(花押)〔(二十一ウ)〕

金春家所<sub>レ</sub>出於秦河勝歷代祕曲傳家督一人而其<sub>レ</sub>他庶子傍孫遂不能<sub>レ</sub>窺<sub>レ</sub>闔奥於萬一<sub>ニ</sub>矣雖然如是兄七郎氏勝不幸而早世故老父家傳之祕奥相續而欲傳之子々而孫々而以殘萬世悉家〔(二十一オ)〕傳祕曲教授於所令相傳也今又汝家傳祕曲不遺所令教授也莫令斷絕矣

明曆二年丙申

〔(二十一ウ)〕

正月廿一日

竹田金春八左衛門

秦安喜(花押)

金春七左衛門殿

六十九歲

參

〔(二十三オ)〕